第二章へ（違う空の下、違う風）

窮屈な常識に縛られることなく
誰も傷つけずに　生きてゆければ…

若かりし日の声は幼く…
臆病な足音が
いつも辿り着けない
道を歩いていた

それでも　あの時とは違う空の下
今は　違う風が吹いている

ひとつ前の電車に乗り遅れてもいい…
何だか　やっていけそうな気がしてきたよ

これからの歩く道　立ち止まらなくても

大丈夫と信じる気持ち
数えて生きよう

どうでもいい体裁に振り回されないで
自分の思うままに　生きて行きたい…

大人になっても迷う心が…
不器用な生き方が
いつもカラ回りして
前が見えなくなる

それでも　あの時とは違う空の下
今は　違う風に吹かれて

空気みたいに漂い　時に任せてみて…
何とかなる事もたくさんあるんだよ

十年後もその先も　恐れることないよ
大丈夫と信じ続けて
第二章を生きよう

過ぎたことよりも
先のことよりも
今が大事
今 生きていると
いふこと

僕の週末

今日の風は何色？
君はどんな色を選ぶの？
僕は心からとり出したクレパス
朝やけがきれいなオレンジ…

動きはじめた一日…
さあ髪を整えて　突っ走る
満員電車にゆられて行く
ウトウトウトウトしながら…

いつもと変わらぬ時間を
今日も追いかけている

明日の土曜日はまさか…

休みに雨なんてツイてない！
特に趣味もなくとりあえずランニング
始めようと思ったチャレンジ…

天気予報を恨むよ…
じゃあ髪を切りに行こう　目が覚めたら
サビだらけのビニール傘で
テクテクテクテク歩いてく…

明日の日曜は晴れマーク
多分いいことがある！

何かが待ってるよ　きっと…

スローライフ

生きづらさは　自分の弱さのせいじゃない
時々牙をむく　その心は
何を求めているのだろう
どうしていつも　届かないのかな…

この世界がもっと多くの
子どもたちの笑い声であふれたなら
きっとあきることのない毎日に
やさしさが生まれるだろう…

みんなのお陰様が連鎖して
地球上をかけめぐれば
ひとりひとりの　形は違っても
しあわせが　見つかると思うんだ

もっとゆっくり　時間(とき)に溶け込んで
ぽっかり浮かんだ雲のように
夢をのせて　明日へつないでゆこう
スローライフ　描きながら
少しぐらいにじんでもいい
君の色があるなら

責めるよりも　自分の声をもっと信じて
まだまだたくさんの　出逢いがある
そして変えていけるのだから…
いろんな景色を眺めて歩こう…

まだ知らないことだらけ
この街にも転がっているステキなこと
そう思う気持ちに光が射し
さわやかな一日になる…

僕らの〝ありがとう〟が世界中に
いつの日か届いたとき
誰かのことを　愛という力で
それぞれが　しあわせにしてるんだ

ほら両手を　胸に当ててごらん
あったかい　いのちの音が聞こえる
希望を捨てないで　一緒に歩いてゆこう
スローライフ　君のペースで
焦らないで遅れてもいい
笑顔でいられるなら

答えなんて…

青葉が芽吹くころ
ちょっとしたことに　悩んだりしてた
周りの景色は　赤やピンクの
美しい花々を咲かせている…

人の心も　季節ごと変わりやすいけど
答えを出せないまま
時間ばかりが　過ぎて
鼓動が止まったかのように
動き出せない悔しさが…

誰かの声にもっと素直に
耳を傾けることができたなら
〝諦めないで　恥ずかしがらないで
ゆっくり進めばいいんだよ〟

今なら　あの日（ころ）の自分に
言えるのにAh...

木の葉が色づくと
物思いに…沈んだりしてた
公園のイチョウが　風に転がり
切なさを一緒に吹きとばすよ…

人の前には　たくさんの道があるんだ
答えばかり求めず
己を知って　歩いて
溢れる涙を拭きながら
歩幅を変えてゆけばいい…

自分の声に気づいたなら
風にチャンスをのせてゆくように

いくつもの人生持ち合わせてれば
もっと楽しく生きられる

そうだよ　あの日（ころ）の自分とは
違うんだって

もっと歩いて　脇道へ
君もあなたも　僕も　ありのままで
はじめから答えなんて
どう探しても　見つからないから

雪の空に

粉雪が降りはじめた
駅のホームで僕らは別れた
君は反対側のホームで
少し俯(うつむ)いてた

本当は暖かい二人の時間を
まだ過ごせると思っていた…
僕は自分の道を選び
君も違う道を歩き始める
敢えて〝さようなら〟を言おう
また会う日のための言葉だから

ずっと堪えていた涙が
こぼれないように
雪の降りてくる空を眺め続けた

下り線の電車がきて
君の足が扉へと向かう
切なくなるばかりの僕に
君は微笑んでた

吐息で曇った窓ガラスに笑顔で
〝また会えるね〟と君は書いた…
二人同じ気持ちがあれば
どんなに離れていても大丈夫だよ
口を〝またね〟と動かす
僕の顔を焼きつけておいてよ

発車した電車に手を振る
見えなくなるまで
雪の向こう側　電車は見えなくなった

風が吹いて

真白な粉雪　舞い上がる
キラキラと輝く二つの心を
この空に刻み込んだ
いつか二人たどり着くまで…

KOHARU

雪化粧した　この街のどこかで
凍えていないかと　君をふと思う…
君に会いたい　この気持ちは何だろう
特別な理由なんて　なくても…

さり気ないやさしさが詰ってた日々
心を重ねたあの頃が　懐かしい

春の匂いが訪れてくるたびに
君の幸せを祈っているけど
風のたよりは　いまだ届かず…

今　僕は闘ってるんだ　進むべき道
岐路に立たされても
君のことを想ってしまうよ…

会いたい　この気持ちは何だろう
君は心と春でコハルだね
いつだって心に春があるから…

特別な理由なんてなくても
ただ　会いたい

雪が溶けていく　陽だまりのカフェテラス
熱いコーヒーの中に　君が映ってる…
ここで会えると思う自信は何だろう
切なくて　理由なんて分らない…

あの時もこんなふうな気持ちだったら
言葉を失うことなんて　なかったのに
桜の花びら舞う季節めぐるたびに

君の幸せを祈っているけど
春風吹けど　今日も届かず…

きっと君は笑顔のまま　どんな時だって
～どこ吹く風～だから
僕のことなんて忘れたかな…

会いたい　そんな君にもう一度
君は名前どおりに暖かく
いつだって心に春を持つ人…

ただ君がそこにいるだけで…
特別な理由なんていらない
また会いたい
ただ　素直に会いたい

シグナル―あなたの願い―

いくつもの季節を乗り越えて
君が流した涙
僕に投げかけた黄色のシグナル
何度見落としたのだろう
もっと早く気づけば良かった

君の気持ちを思うと　胸が苦しくなって
帰り道　車のテールライトが滲んで見えてくる…

うまくは伝えられないけど
まだ間に合うなら
僕らの何気ない一コマ一コマ
一緒に描いていけるといいね

あなたの願いを叶えるのは

本当に　僕でいいですか…

見上げた夜空に流れ星
君の願いが届く
僕の言い訳に付き合わせてばかり
一人淋しかったんだよね
ずっと好きと言えずにいたから

今は優しい気持ちに　胸が熱くなってく
次に会うときは　しまっていた言葉持っていくよ

許してもらえるといいけど
まだ間に合うかな
不器用な精いっぱいを　ハラハラしながら
いつも見守ってくれたんだね

これからは僕が守るべき人

それは　君でいいですか…
僕らの日常の一コマ一コマ
二人で作ってゆけると思うから
あなたの願いを叶えるのは
この僕に任せてください…

生きるってこと

時代(とき)の流れを止めることは
誰にもできないことだけど
生きるための真実(ほんとう)の術を
失くさないでほしい…

無理して追いかける必要もない
変えてゆくべきものと
変えてはならないものがあるんだ
たとえ僕らは　つぎはぎの人生でもいい
自分の身の丈なら　それでいい

ガラス越しに見た心じゃ分からない
ぬくもりを感じる
君の　その心で触れてみよう
終わりなどない大人の階段

いくつになっても辿り着けない
でもそうやって　生きていくものだよ
生まれて来たのだから…

いつからだろう〝昔の方が良かった〟
と口癖になったよ
何のために生きるのかさえも
分らないままに…

生まれ来たことに喜びあり
つないでゆくいのち
そこから始まる物語
一人一人の役割が　見つかってゆくよ
失うものがあっても　構わない
新しい何かが　目の前にきっとくる
信じ続けていて

そう　好きな自分を生きてゆこう
水平線の向こう側にある
見えないものを探そうとする
でもそうやって　夢を持てるんだよ
そうやって生きていくものだよ
生まれて来たのだから…

季節から未来へ

季節ごとに吹く風　癖のある文字の手紙
君とはしゃいだあのころ　淡い淡い恋の奇跡…
春やさしい風はゆっくりと二人を運んだ
流れる時をもどして　いま君がいるように
ここから伝わるように叫ぶよ
虹のかかった空の向こうまで　はりさける
思いの全て正直に届けた…

こぼさないように両手で受けとめて
破れそうな夢の続き巻き戻して
もう一度もう一度　追いかけて行きたい

今日は　明日に続いているよ
やがて君も　確かな未来へ向かって行くんだ

季節ごとの雨にも　懐かしい匂いがする
君を感じてたころの　ずっとずっと前の記憶…
秋しぐれる雨は音もなく悲しいけれど
あの時君がいたから　いま僕がいるんだ
やっとそう思えるようになったよ
雨上がりの雲の切れ間から洩れてくる
光の中にやさしさを見つけた…

あふれるほどの涙を乾かして
つぶれそうな胸の扉こじ開けたら
眩しくて眩しくて　手をかざしたけれど

今日は　明日に変わって行くよ
そして遥か彼方の　未来へ向かって行くんだ

いくつもの季節を越えて　未来へ…
いつの日かもう一度　君に会えたなら
〝ありがとう〟って言える気がする～

痛み

痛いんだね
ツライんだね
でも　何かのために
乗り越えようとしているんだね

自分の痛みは　自分にしか分らない
伝えることは難しい
我慢すればするほど…

痛いんだね
苦しいんだね
でも　誰かのために
生きていこうと決めたんだね
自分の痛みは　自分にしか分らない

与えられた試練だけど
がんばろうとするけれど…

気力が欠けてゆく　無口になる
涙があふれて止まらない
何もできないもどかしさ
人にやさしくなれない自分がいる…

いいんだよ
今は　それでいいんだよ
時にはため息ついて吐き出して
風に身を委ね　黄昏ゆく空を
見て歩くのもいい
決してひとりじゃないことが分るから
そう　宇宙は広いんだよ

思い

君を思うとき　胸が痛くなるよ
どうか同じ空の下にいてくれたらと思う…
いま再びスタートラインに立った君
どれだけ頑張ったことだろう…

さあここから羽ばたいて行こう
小さな羽を大きく広げて
空いっぱいに自分を描いてほしい

君は生きる道を選ばなくちゃダメだよ！
君は何も悪くないんだからね…
この社会に正しいことなんて…初めからない…
まして〝間違い〟という言葉の説明さえもつかない…
今だから　言えることがある

今だから　許せることもある…
あの頃の君を　もう追いかけなくてもいいんだよ

君は好きだった　あの七色の虹の物語を
今でも思い出せるかい？

果てしない夢を追いかけていた日々
何ひとつ失うものはなかったはずなのに…

君が好きだった七色の虹は
今でも　心の瞳で見えているかい？

君のやさしさが　空に舞う
風と共に　新たな夢を見つけて…

君のやさしさ　伝えておかなくちゃ
せっかくの人生　せっかくの君の人生だから

春のおくりもの

春になると　やってくる
光とともに　やってくる
彩り美しく　咲き誇る花々

風とともに　やってくる
あちらにも　こちらにも
ほんのり　やさしい香りが…

この自然の優美なスペクトルに癒され
人と人がつながってゆく
不可思議ないのちの季節…

また今年も　やわらかな若草色の風が
頬をかすめていった
まるで　約束を交わしたかのように…

私たちの新しい一歩のために
時には強くも　時には冷たくも吹き
夏の訪れを知らせる
何てステキなおくりもの

過ぎ去りし日の絵

時代にのりおくれた時のかけらに
忘れたものは何ひとつなかった

そして　あの日の空の青さと
おい茂った草の碧さと香は
誰かの描いた絵となって
永遠に残った
誰の心の中にも

ただ　その絵の持ち主が
誰なのかわからないまま

（昭和五十六年十月二十六日）

五月雨の日（ころ）

雨だれの中をそーっと覗いてみてごらん
いつかどこかに置き忘れた
想い出たちが見えるでしょう

雨音にそーっと耳を澄ませてごらん
いつかどこかで誰かと聴いた
メロディーが流れてくるでしょう

五月雨はいじわるだよね
人の心の中にしのび込んでさ
通せんぼしちゃうんだよ
夏も恋も当分おあずけだって

どんなに雨に打たれても
紫陽花がきれいなのは

たった今　恋をしはじめたばかりだから
なんだよ
ほら　かたつむりがやって来た

（昭和五十七年五月三十一日）

小さきころ

子どもたちは遊んでいます
帽子をかぶった子がいます
笑ってる子がいます
怒ってる子もいます
泣いてる子もいます

だけど…子どもたちは遊んでいます
みんな一緒に遊んでいます
悩みもその悲しみも　知らないのです

私にはひとむかし前
小さきころの　すべての広さを
今はもう…
狭く感じることしか出来ないのです

小さきころは　だんだん
消えてしまうのです
誰のせいでもなく…

（昭和五十四年九月二十四日）

My home town

(H.25.2.5)

あなたと　夢を語り合った
あの頃のときめき
いつの間にか屋根の色を描いて
やがて少しずつ　形になっていった

マイホームタウン　緑の街に光注ぐ
新しいいのち　その手をしっかり握りしめて
一緒に　歩いて来た道

今　この高台に立ち夕陽に染まる
連なる遠き山を　眺めれば
懐かしさと淋しさが　込み上げてくる
巣立つ我が子に〝いつか帰る場所は
ここだよ〟と　心で叫んでいた

あなたと夢を分ち合えて
本当に　良かった
心に吹く　隙間風を互いに
そっと受けとめて　今日に辿り着いた

マイホームタウン　桜並木が空を仰ぐ
増えたシワ数え　苦笑いしながら手をつなぎ
さらに　夢を持ち続け

もう巻き戻せない過去（とき）　想い出の箱
はじける若き日々は　万華鏡
美しさと優しさが　混ざり合っている

どんなことにも　意味があっての今
ふるさとに抱（いだ）かれて　生きてゆこう

ありがとう　My home town

あとがき

この詩集は、広い宇宙の中のちっぽけな一個の人間が綴ってきたものに過ぎません。今日ここに私が在るのは、どこかで支えて頂いたみなさんのお陰です。世界中を見渡せば、日々多くの問題が絶えません。

各地で被災された方々を思っては、何もできずに心を痛めておりました。また〝いじめ〟による若者の自殺に、悲しみ涙しておりました。

そして、難病と向き合い苦悩を抱えている人も、たくさんいらっしゃいます。現在、私自身も闘病中であります。このような自分に今できること……その答えが、この詩集を出版することだったのです。

心に秘めていた様々な思いを、素直に言葉にして一冊の形にしました。一人でも多くの人の心に触れ、誰かの心に響いたなら幸いです。

最後に、この詩集の出版を後押し、ご尽力下さいました日本文学館のスタッフの皆様方に心から御礼申し上げます。

ありがとうございました。

十時のん

著者プロフィール

十時(とどき) のん

本名　十時信子(とどきのぶこ)
1962年　大分県出身。
1969年　宮崎県清武町立清武小学校入学。
1978年　宮崎県西都市立妻中学校卒業。
1981年　佐賀県立武雄高等学校卒業。
1984年　保育士資格取得。
1988年　結婚。
1996～2012年　"書"に勤しむ。
2011年7月　悪性リンパ腫発症。
現在も闘病中。
趣味　音楽。
スポーツ　ソフトボール。

空と風とボクら
―大丈夫、君は一人じゃない―

2013年9月1日　初版第1刷発行

●著　者　十時 のん
●発行者　米本 守
●発行所　株式会社日本文学館
〒160-0022
東京都新宿区新宿5-3-15
電話 03-4560-9700（販）Fax 03-4560-9701
E-mail order@nihonbungakukan.co.jp

●印刷所　株式会社平河工業社

©Non Totoki 2013 Printed in Japan
乱丁本・落丁本はお手数ですが小社宛にお送りください。
送料小社負担にてお取り替えいたします。

ISBN978-4-7765-3583-6